

研究成果



根釧農試 研究通信

第13号 2004年3月

TEL:01537(2)2004・FAX:01537(3)5329

新しい牧草品種・肥料

○チモシー「北見22号」

「北見22号」は従来の晩生品種（「ホクシュウ」）より耐倒伏性と斑点病抵抗性が優れ、乾物収量が同程度かやや多い新品种です。

出穂始は「ホクシュウ」より1～5日遅い6月24日～7月5日で、1番草の収穫適期が最も遅い採草用品種として育成されました。

「北見22号」を導入することで、1番草の収穫適期幅が広がります。「北見22号」は晩生の採草用品種として年間2回の採草利用を主体とし、放牧にも利用できます。

種子供給は2007年（平成19年）からの予定です。



写真1 「北見22号」(左)一番草の草姿(右「ホクシュウ」)

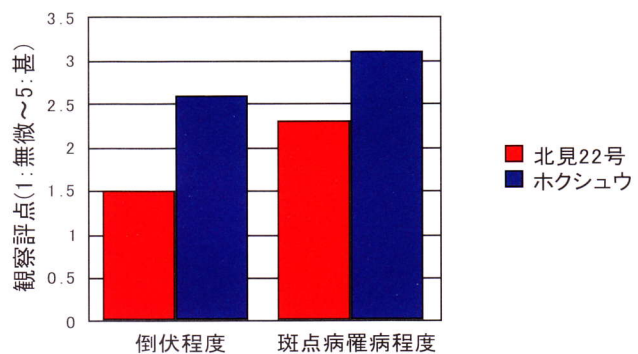


図1 倒伏程度および斑点病罹病程度



写真2 倒伏状況

「北見22号」(左)は「ホクシュウ」(右)に比べて倒伏程度が小さい。

表1 チモシー「北見22号」の主要特性

	北見22号	ホクシュウ	備考
出穂始	6.28	6.26	月・日 道内7試験地平均
収量指数	102	100	2カ年合計、「ホクシュウ」比 道内7試験地平均
混播時収量指数	110	100	2カ年合計、「ホクシュウ」比 シクロバとの混播
越冬性	6.6	6.3	1:無微～9:甚 道内7試験地平均
耐寒性	強	強	根釧農試耐寒性試験結果
早春の草勢	6.9	6.5	1:不良～9:極良 道内7試験地平均
放牧時採食程度	62	62	(%)道立畜試放牧特性検定試験結果
茎の太さ	6.4	5.3	1:極細～9:極太
茎数	6.5	7.6	1:極少～9:極多

○25粉状苦土りん肥「クサリッチ」

25粉状苦土りん肥「クサリッチ」は、スラリーに添加・混合することによってスラリーのりん酸含量を調節し、施肥作業の省力化を図ることを目的に開発されました。

「クサリッチ」は、く溶性りん酸を25%（うち水溶性10%）、く溶性苦土を10%含有しています。本資材は粉状の肥料なので、牧草に対する肥効とともに、資材混合・散布時におけるスラリー中りん酸含量の均一性についても実証規模で確認しました。試験の結果、スラリーにクサリッチを添加することによって、スラリーのりん酸含量をほぼ想定通りに調節できました。また、混合したスラリーは均一性を大きく損なうことなく散布可能で、牧草生産に対しても対照資材である粒状重焼りんと同様かそれ以上の効果を期待できました。本資材をスラリーに投入した後は、投入槽内スラリー全体の十分な攪拌と、速やかな散布が望まれます。また、混合時の均一性については、乾物率5-9%、粘度7-90 mPaSのスラリーを供試して評価しました。性状の著しく異なるスラリーを使用するときには、適宜、希釈等による均一な混合に留意する必要があります。

○粒状苦土炭カル入りBB肥料「B029」

この資材はBB肥料に炭カルを混ぜた肥料です。草地は一度造成されるとしばらくは耕起されることなく、肥料の表面施用と刈取り・利用が毎年繰り返されます。この結果、草地土壌のpHは造成後の経過年数とともに低下することが知られています。草地の生産性を良好に維持するためには、土壌pHを5.5-6.5に維持することが重要で、そのためには年間約40kg/10aの炭カルを表面施用することが必要とされています。しかし、炭カルが肥料とは別に草地に施用されることは少ないのが実態です。この肥料を普通に施用すると、年間約20kg/10aの炭カルが草地に施用されることとなります。これにより、牧草体と土壌中のカルシウム含量がやや改善されました。収量性に遜色はなく、炭カルの混合によって懸念された窒素の肥効低下は認められませんでした。草地土壌のpHを維持するための上記の必要量よりもやや少なめですが、この肥料を連用することにより、草地土壌における経年的な酸性化の緩和が期待できます。